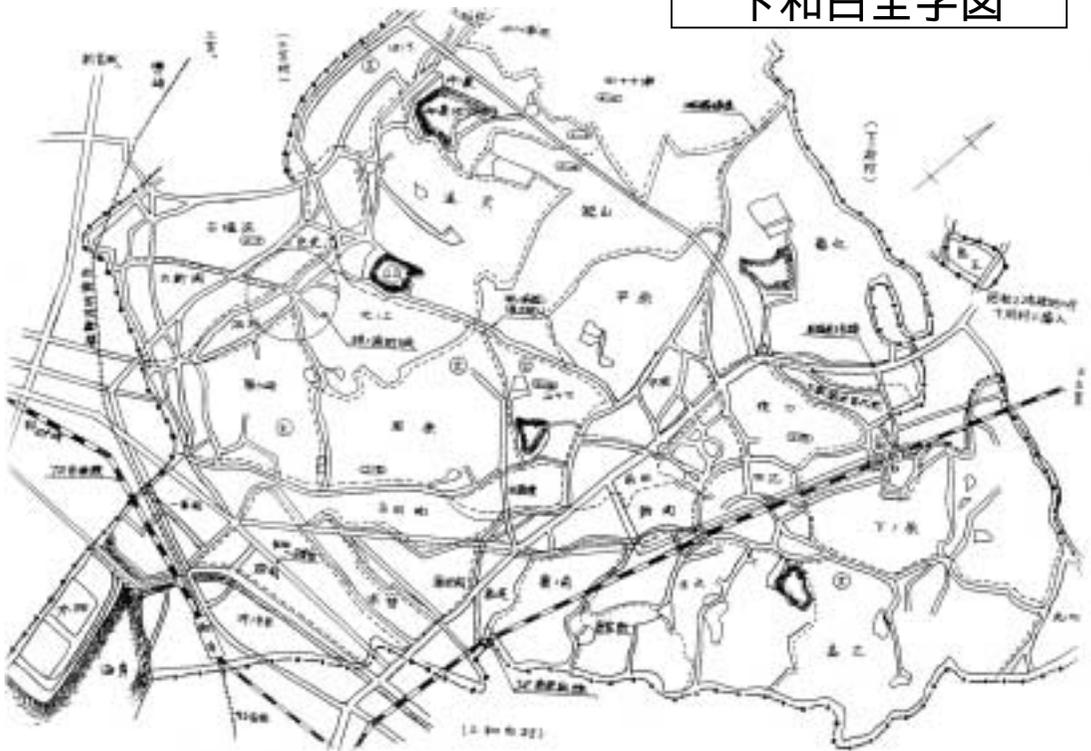

第2章 下和白村の歴史

下和白全字図



下和白の地名

まず和白の地名について考えてみる。

東洋言語学者の話によると、『和白は神功皇后新羅出兵の時の軍の評議場であった。和白は会議、議会などを意味する』とあり、神功皇后新羅出兵の時、天皇は熊襲征伐を主張、皇后は神託によって新羅出兵派であったが、議論が分れて仲々まとまらず、天皇の発案で高き所に登り会議が開かれた。その場所が和白の島見山であった。この時から『和白』の地名が生まれた。

次に下和白の地名であるが、「安河内安宏家の古文書」に次のように書かれている。

『九代延昌、後に三郎左衛門虎昌と改む。筑前国立花山城主戸次丹後守鑑連入道道雪の幕下に附属し、忠勤を励んで戦功多し。道雪養子立花左近将監宗虎より諱の一字を授く。のち虎昌と改め、粕屋郡下和白村を領す（1570年、元龜元年）。是に於て屋形を下和白の里に建つ』

前記のように、それまで和白郷と呼んでいた一帯が、この頃上和白、下和白と分れたものと考えられる。

下和白の遺跡と古墳

四十ヶ浦遺跡

出土品.....先土器時代の石槍 縄文時代の石鏃（1） 弥生式土器（2）

和白地区で一番古い遺跡である。

仲ノ裏遺跡

出土品...縄文時代の石鏃、石匙（各1）

後口古墳

下和白大神神社の裏手にある古墳。これはまだ発掘されていない。

飛山古墳

二カ所で発見された。

1号墳 460～530年頃と思われる。和白で一番古い古墳と考えられる。

出土品...ガラス玉、滑石製孔円板、直刀、剣刀子、勾玉その他。

2号墳 堅穴式石室

出土品...鉄鏃（1）1号古墳と同じ頃のものと思われる。

3号墳 破壊されて跡だけ残っていた。

相ノ浦北岸一帯

出土品...縄文中期三稜尖頭器、弥生中期から終末期の土器等が出土。

塚原古墳群

地名が示すように一番古墳の集まっていた地域である。昭和9年から10年に亘っての雁の巣飛行場建設の際、この山を崩して土を持ち出したため、古墳群は消えてしまったが、鉄刀や人骨が出土し、九大に持ち去られたという。

尚、前公民館長小金丸種尚氏家所蔵の古文書には、次のように書かれている。

『此の夏（1568年）中国山口に聞ける、毛利多勢を以て立花へ責め下る由。

立花城と申すは筑前第一の要害の城也。駒の足立悪しく攻寄り難き故砦を作り、此海辺下和白の内、桂ヶ崎山（勝ヶ崎 塩浜の裏山一帯を含む）へ立籠る。これにより陣の山とも云う也。暫く見合居る処、道雪公大いに怒り給う。桂ヶ崎へ籠りたる中国勢を追散らさんと、所々の川上より田水を流し、上和白海辺要害能き所に出城を築き、勢を添え押寄せ討取らんと立花勢打って出る。此所今に立花屋敷と云う也。又中国勢桂ヶ崎山より麓へ打ち出る。地蔵森浜の広野にて合戦あり。立花勢四百ばかり中国勢数百人討取る。

此の辺塚多し、之により塚原山と云う也。

今に至る迄秋の頃雨降る夜、1カ年に1、2度も桂ヶ崎山の麓より塚原山まで千丁松明と申して城の火多く続くなり。これ大沼からは見えず、これ立花屋敷より能く見える也。誠に其時の中国勢の念火と云う也』

この古文書の表記から考えると、塚原古墳群はこの立花と山口の毛利勢との合戦で倒れた毛利方の武将の墓ではないかと考えられる。

山ヶ下古墳群

昭和54年、和白丘中学校建設に伴う事前調査で発掘された。550年～600年頃の横穴式後期古墳。

1号墳

出土品...須恵器、土師器、耳輪環

2号墳 1号墳と同じ。

3号墳

出土品.....鉄直刀

神功皇后 船繋ぎ松 相ノ浦の地名

相の浦の由来は、神功皇后征韓の際、船が香椎の浦を離れると急に南風が吹き出し、海が時化ることが予想されたため、博多湾を出ることを見合わせ、勝ヶ崎を廻ってこの浦に船を繋いだことから、後に浦人達が「南風」ノ浦と呼んでいた。これが訛って『相ノ浦』と呼ぶようになったという。



神功皇后御繫船記念碑

下和白相の浦（和白五丁目地内）の入口に、神功皇后ゆかりと伝えられる八角のコンクリート壁の大きな井戸がある。傍に記念碑があり、碑の表には『神功皇后御繫船遺跡』と刻まれ、裏面には次のように記されている。



神功皇后ゆかりの八角壁の井戸

紀元2600年、昭和16年記念碑建立

『この地はその昔神功皇后三韓御征討の際船を繋ぎて陸に上り、暫く休ませ給ひ、釣魚の遊びを為し給ひし旧蹟として、後世に社殿を創立、神功皇后を奉祀せりと言ひ伝う。明治維新の頃までは、この山下に船繋の松と称する老松あり、枯死して後、明治37年村民相計りて稚松を補植し、更に境域を拡大し、社殿を改築せり。謹んで按ずるに、神功皇后三韓御征討の御遺蹟は幾多の星霜を経て殆ど煙滅に帰せんとするもの鮮からず。この時にあたり、村民同心戮力、祭祀を嚴修すると共に、遺蹟を顕彰し、後世子孫をして矜式するところあらしめんとす。寔に嘉みすべきなり。

茲に由縁を略記して、後世に伝ふと云う。』

注) 相ノ浦の位置は「定光、北ノ上、勝ヶ崎、飛松」の字が接する地点で図示した地域と思われる。

唐ノ尾の地名

鹿児島本線、香椎から和白を経て筑前新宮駅へ大きくカーブする丘の突先を『唐ノ尾(トオノオ)』と呼ぶ。その昔、伝教大師と共に立花山へ登った二~三の人が、大師が修行された唐の国の方角を尋ねた折、大師が指差された原野から多くの鶴が飛び立ち、中和白の丘の端に降りたことから、この原野を『唐原』、鶴の降りた附近を『唐ノ尾』と呼ぶようになったと伝えられている。

さやの神

福岡工業大学(和白東三丁目)前の道を挟んで、同校の運動場側の小高い丘に小さな祠がある。塞の神と称し願いごとをかなえてくれるという。云伝えによれば、百日咳、寝小便、歯痛など、子供の病気に駿^{ききめ}があるとして地元は勿論、近郷からもお参りがあったようだ。

また、花柳病、陰萎になやむ人々の祈願をかなえてくれるということで、昔は奉塞の木製、石製の陽物で飾られていたという。



さやの神

長楽山円相寺と相ノ浦



長楽山 円相寺

浄土宗鎮西派 長楽山 円相寺

所在地 和白丘一丁目十番四八号

開祖は博多一行寺住職四世応誉といい、元和元年(1615年)に創立された。

初め相ノ浦(現和白五丁目地内)に在ったが元禄年間に現在地に移転したと伝えられている。

古老の話によれば元和元年浄土宗円相寺が相ノ浦に建てられ、その後下和白に移転、『北ノ上』の円相寺跡地に二代目の住職の墓があ

り、安貞様と呼ばれ、円相寺より祭りに来られていたという。

相の浦は和白地区随一の良港で、博多～裏粕屋郡を結ぶ船の泊り場となっていた。このような環境から神功皇后磯遊びの船繋ぎ伝説も生まれたと考えられる。

この相ノ浦へ応誉和尚が布教に船で通われ、相ノ浦に小さな寺を建て住まわれるようになったと伝えられている。

相ノ浦の太田 武氏邸左側の道を上がっていくと、一寸した石段があり、その右側が円相寺二代目安貞大徳の墓、石段を上った正面の広場に相ノ浦観音堂（裏糟屋郡千人参り77番札所）、その傍らに不動尊石像がある。



観音堂

波切不動尊碑

二代目安貞大徳様の墓

円相寺跡碑

相ノ浦観音堂（裏糟屋郡千人参り77番札所）

安河内虎昌、下和白を領有

下和白の地名の所で書いたように、安河内虎昌は1570年（元龜元年）頃、立花道雪から下和白を拝領し、移り住んで来た。これは文献にはないが、次のように推測される。

1567年9月8日宗像大宮司氏貞の軍勢が新宮浜より上陸、和白郷に乱入して民家を焼き払う戦闘が起きた。

宗像勢は陸路と海路の双方より立花城を攻撃した。為に道雪は新宮浜より敵の侵入に備えて、安河内三郎左衛門虎昌に下和白を与え、海への備えとしたものと考えられる。

下和白・大神神社

祭神 おおものぬし 大者主神（大己貴命）
おおなむちのみこと

由緒 『うぶすなのみ産神なり 祭る所・大己貴命なり 祠は村の東、林中にあり 上和白村より勸請せり 年歴つまびらかならず 社内に田神社あり』【「筑前国続風土記附録」より】



下和白・大神神社

地元古老の話

慶長五年（1600年）より以前の創建、すなわち立花城の家臣、安河内延昌（下和白安河内氏の祖）が下和白を領して、この地に移り住んだのが元龜二年（1571年）ごろとすれば、今より四百数十年前の昔、上和白村より勸請、祭祀されたものと判断される。以下同神社境内の奉納物を記す。



安河内正七氏奉納の石灯籠

1653年、安河内正七氏石灯籠奉納

この灯籠は和白地区第一号の灯籠である。

1714年7月 鳥居

額には、「大神明神」他に「発起、安河内善六氏子中」と刻されている。大人が頭を下げてやっと通れる程のミニ鳥居。和白地区一番の小鳥居である。



下和白大神神社のミニ鳥居

1801年、1812年、1841年、1848年に夫々石灯籠が奉納されている。

下関市紅屋源蔵が1861年に狛犬、同65年に「幟」、同67年に「横幕」を夫々寄進している。

紅屋源蔵は安河内家の出で下関へ行って成功した商人であろうと思われる。

大正2年5月 鳥居及び境内へ登る石段が寄進された。

発起人には『参宮司同行』安河内文作、善三郎、善兵衛、助吉、辰次郎、惣三の名がある。安河内一門で伊勢詣りをした後、その御祝の意味での奉納であろう。

殿様道（1640年頃）

将軍が代わると、新将軍就任の御祝に『朝鮮通信使』が日本へ渡ってきた。そのお世話は通過する藩が全般的に行うこととなっていた。福岡藩は『相ノ島』に接待殿を作り、そこで全般の世話をした。その為藩の重臣、学者、時には殿様もお出ましになった。

初めは唐津街道を通過して津屋崎に出て、船で相ノ島に渡る道程だったが、甚だ不便のため、検討の結果、新道を通すこととなった。即ち唐津街道の新宮町原上附近から上和白へ下り、大神神社の前へ出て、海浜をめぐり中和白から唐ノ尾。唐ノ尾の先は博多湾が入り込んでいて通れないため、対岸へ向けて防波堤を築き、山ヶ下へと上る。そこから和白丘三丁目を通り、人丸神社前をぬけて新宮浜へ出る。このため新宮浜から相ノ島へと、大変便利になった。

この道を『殿様道』と呼ぶ。博多湾を仕切った殿様道のメリットとして『新開』『前田』が後に水田となった。

相ノ浦越し（^{どうでこ}道天越し）

相ノ浦越し、又は「道天越し（ドウテン越しが訛ってドウデ越しになったといわれている）」とも呼ばれた。玄海灘ぞいの粕屋、宗像の人々が博多へ出る大事な道であった。玄海灘ぞいに松原を通り新宮町下府へ出て、下府から人丸神社道を通して『殿様道』へ。美和台公民館長佐藤悦路氏邸附近から右折、急坂を上り飛山を越えて相ノ浦へ至る。

相ノ浦から舟で博多へ向うというのが当時最も便利な道であったようだ。

四十ヶ浦池（1650年）

四十ヶ浦池は『殿様道』築堤工事によって干拓された土地、今の「新開」「前田」の灌漑用として構築されたものであり、この土地も新田として農耕地にするためには十年の歳月を要した。和白地区で最初に造られた溜池である。

干拓地近くに適地がないため2kmも離れた四十ヶ浦を池地に選定し、この池から延々水を引いた。当時としては大変な難工事であったと推定される。池の周囲は当初280mであったが、現在は約1kmである。



四十ヶ浦池

その他の下和白地区溜池

龍化池 1687年竣工 周囲 315m

仲裏池 1901年竣工 周囲 242m

安河内家邸内の不動明王（1698年）

下和白安河内元邸（和白丘一丁目）には、その昔殿様の休息用に豪邸を建てた記録が残されている。そして殿様のご来遊の時の安全を祈って邸内に「不動明王」が祭られていた。

相ノ浦香椎神社（1707年）

相ノ浦北ノ上に鎮座。

古い記録として「筑前続風土記附録」の中で『拝殿九尺四方。祭祀陰曆九月九日、十一月六日の両度。奉仕武内高間、桂ヶ崎（勝ヶ崎）北方村中にあり、宝永年中に勧請せり。相ノ浦八戸産神なり』とある。

その後は毎年11月6日大祭には官幣大社香椎宮より神官出張のうえ祭典執行せらる云々と記録されている。



相ノ浦香椎神社

若宮様

昔まだ和白平野が海だった頃、^{とんまつ}飛松（旧塩浜集落裏山）の麓をめぐって、幅1mくらいの路が走っていた。

それが当時唯一の下和白 塩浜 相ノ浦 新宮への道だった。

塩浜を出て相の浦に向ってすぐ、少し坂道を登った所に頓松（飛松）といって5～6本の素晴らしい松の大木があって、遠くから眺めてもうっそうたる森をなしていた。

その老松の下に『若宮様』の小さな御堂がある。若宮様は牛の守り神である。大正頃ま



牛の守り神 若宮様

で牛は農家の宝物、農耕の大切な中心的力であった。この大事な牛を護ってくださる神様が若宮様だった。

大正頃までは下和白や塩浜の農家は年に一度、農耕の宝である牛を和白潟へ連れて行き、きれいに海水で洗い着物等で着飾らせて、この若宮様へお詣りし、牛の健康をお祈りしたものであった。

この丘下に大きな井戸があって、白味をおびた美しい飲料水が湧き、塩浜中組などは大方この井戸水で生活をしていたが、今はその影もなくなっている。

下和白の庚申堂（1711年）

下和白安河内和三氏（和白丘三丁目）の邸の傍にあり、昔は殿様道を守ってこの街道筋に立っておられたのであろうが、今日では裏道になってしまっ庚申堂も忘れられそうになっている。1714年の建立。

当時は地元の主婦達の『庚申待ち』という信仰と親交の中心となっていたようである。



下和白 庚申堂

蒲池開

大蔵池構築の発案者 蒲池重広は、郡奉行として非常に有能な人だったらしく、下和白現在の「和白丘三丁目」附近まで、博多湾の入海を堰き止めて干拓し、水田二町四反ばかりを造成して、自分の名をとり『蒲池開』とした。

博多湾の入江も段々沖へ押しやられてゆく。此の事業の現地指導者は、安河内本家十四代、庄屋九郎右衛門と考えられる。数次の干拓によって田も沢山頂戴したのであろう。安河内家は和白海岸まで出るのに、ずっと自分の土地が続いて他人の土地は通らなかったと伝えられている。

安河内家八十婆さん

安河内安宏氏家の古文書に次のようなものがある。

『裏粕屋郡下和白村

八十歳 惣次郎母

殿様、老人御恵養の思召を以て、名元御覧の極、先程御帯府中に付、追而御下国箱崎松原御通駕の節御目通可申、仰出の事』

安河内正七妻寿子は働き婆さんとして四隣に響ていたが、遂に藩庁の役人の耳に入り、殿様が江戸より御帰りの際、箱崎松原において御言葉をくださったという。

下和白の六地藏 (1798年)

和白丘二丁目、県道26号線（旧国道3号線）の傍にある。附近の字名を『地藏後』と称するので、干拓堤防の守護神だったかもしれない。



干拓堤防の守護神・六地藏

和汐小学校 明治15年（1882年）

奈多鯨学校が明治14年に開設され、それに刺激されて下和白二軒茶屋（旧国道3号線沿い）に和汐小学校が開設された。古老の話では生徒はみな素足で登校、学校横の農業用水で足を洗って教室に入っていたという。

当時、小学校は4年制で、教室が一つしかなかったため、上級生は奈多や三苦で借室して学んでいた。



昭和33年頃の和汐小学校跡附近

和白村の役場 明治22年（1889年）

明治22年町村制が施行され、上和白村、下和白村、塩浜村、三苦村、奈多村の5カ村をもって和白村が発足し、下和白地内（現在の東消防署和白出張所所在地）に和白村役場が建設され村政の中心となった。

明治22年の当初予算が1,781円33銭8厘で、戸数は536戸、人口2,584人（男1,356人、女1,228人）の静かな農漁村であったと記録されている。



昭和30年頃の和白町役場

昭和29年11月町制施行により和白町となる。

昭和35年、福岡市に合併し旧和白役場庁舎は福岡市役所の出張所として利用されていたが、昭和47年に解体された。

和白駅 明治37年（1904年）

粕屋郡内外の石炭開発に伴い、鉄道を敷設して出炭を集約する考えから、博多湾鉄道株式会社が発立された。明治35年用地買収を開始、土井～酒殿間の鉄道敷設工事に着工するとともに、明治37年1月には西戸崎～須恵間が竣工し運転営業を開始した。同時に奈多駅も開駅したが、和白駅は当初はなかった。安河内千吉氏（和白丘一丁目）が自分の土地を提供するなど、駅開設の運動を行い、同年12月にやっと開駅した。



昭和20年代の和白駅構内と新開公営住宅

開駅当時の和白駅は堀立小舎であったという。また、大正13年には現在の西鉄宮地嶽線新博多～和白間、大正14年には和白～宮地嶽間の営業も始まった。

昭和2年、宮地嶽線和白駅落成。

昭和4年、宮地嶽線電化完了。

昭和41年、和白香椎線と宮地嶽線は立体交叉となり現在に至っている。



現在の和白駅・左...西鉄宮地嶽線



和白駅のポイント切替風景

道天池 明治39年（1906年）

塩浜地区は池を持たず、下和白から池の水を分けてもらうなど、水田の水には困っていたが、何とかして自分達の池がほしいとの悲願から、ようやく道天池の構築にこぎつけ、明治39年3月着工した。

水面面積4反2畝の溜池の記念碑が残されている。（現在は四社神社境内にのこされている）



道天池記念碑

許斐硝子工場創業と和白駅前地区 大正6年（1917年）

許斐友次郎氏が和白海岸にてガラス工場の営業を開始する。

ラムネびん、サイダーびん、酒の一升びん等を主として製造した。最盛期にはラムネびん日産3万本の、ラムネびん工場としては日本屈指の大工場であったが、その後、労働争議が激しくなり、昭和5年2月21日の火災で遂に工場廃止に至った。

駅前地区は和白駅の開設や許斐硝子工場の発足などによって急速に発展し、運送店、白雪雑貨店、割烹旅館、会社の従業員住宅、床屋、飲酒店などが次々と出店され、当時の和白村では一番の発展地域であった。



和白駅前割烹旅館おたふく屋

筑前新宮駅 大正10年（1921年）

大正4年6月、鹿児島本線「古賀～香椎」間に列車運行調整のため信号所が設置され、大正10年10月1日には信号所を廃止して新たに駅が設置された。

所在地は福岡市東区和白丘一丁目22番27号（旧粕屋郡和白村大字上和白無番地）で、新宮町との境界にあり、駅舎は福岡市、ホームの一部は新宮町となっている。

「新宮駅」は和歌山県新宮市に現存するため、混同を避けて『筑前新宮駅』となった。その後、駅前の広場や道路が整備され、現在では乗降客数も九州で上位を占める駅となっている。

駅前の一角に、当時の駅前整備に協力した道路用地寄附者の芳名碑が建立されている。



現在の筑前新宮駅ホーム



道路用地寄附者の芳名碑



筑前新宮駅前よりの標元（距離）

和白駅前大師堂 大正12年（1923年）

和白駅裏通りに小さな大師堂がある。正面の板額に粕屋北部新四国千人詣り第五十四番霊場とあり、弘法大師像、十一面観音像、不動明王像の三体の石仏が祀られている。

これらの石仏は大正12年、姪ノ浜で造られ「カネンテ」（かつての博多湾岸、船つき場）まで船で運ばれ、和白駅前住民が「ハッピー」鉢巻姿で、紅白の綱で車力に乗せて引いて来たという。以来地域の人達の信仰の場となっている。



和白駅前大師堂

福岡特殊ガラス工場創業 昭和14年（1939年）

昭和14年、筑前新宮駅前に中島広吉氏によって設立された。非常に皇室に愛されたガラス会社で、皇族も次々と来訪され、昭和33年には昭和天皇、皇后両陛下の行幸啓の光栄に浴し、町を挙げての大騒ぎであった。

昭和61年社名を「マルティグラス株式会社」に改め商標を統一した。



昭和33年頃のマルティグラス（株）手前は旧3号線



昭和64年頃のマルティグラス（株）

下和白の文教施設

下和白は文教地区ともいえる。以下に学校名を記す。

福岡無線学校

昭和28年西戸崎に開校。昭和30年2月現在地へ移転。

昭和33年に電波学園となり、昭和38年福岡工業大学の発足により附属高校となる。



昭和34年頃の風景

明林高校

昭和32年発足。昭和40年立花女子高校として再出発した。

朝鮮学校

昭和48年4月開校



造成中の朝鮮学校用地

美和台の誕生と名称の由来

昭和35年8月、和白町が福岡市に合併されると、市の大都市圏意識が急速に高まり、県道26号線沿道に進出する企業が増加した。西日本鉄道株式会社の西鉄宮地岳線沿線の分譲宅地開発計画を端緒として、福岡市においても、昭和43年に下和白・四十ヶ浦・飛山一帯の開発計画による現地調査の結果、約600万平方メートルの団地開発計画が決定された。市議会にも説明承認され、福岡市住宅供給公社の事業として施工されることとなった。

昭和44年から土地買収交渉に入り、地元地権者の協力によって翌45年買収契約が成立。昭和47年8月の入居が開始されると48年には222戸、49年、50年度には563戸と急増し、当初計画の建築数1,274戸に対し1,185戸の大集落が完成しつつあった。この間行政からの連絡調整のため町界町名整理にある町名毎に、その設置指導がなされ、各町に自治町内会が結成発足された。

地域の名称について三苦側と下和白側の意見が対立したが、関係者一同思案の末、三苦の三を“美”と読み替え、下和白の“和”と結んで「美和台」という美しい町名で意見が一致した。

美和台小学校の開校

当初、小・中学生は和白小・中学校に通学していたが、昭和48年度には和白小学校が満席となった。団地内には小学校用地が確保されていたので、教育委員会も緊急対応で新設校建設に着手され、昭和49年4月に美和台小学校が開校した。

美和台公民館の開館

美和台校区を住み良い地域とするため、お互い共通の社会活動について学び、社会教育振興のリーダー育成を目的として、昭和52年に美和台公民館が開設され、活発な公民館活動が展開されるようになった。

美和台校区自治連合会の発足

昭和48年に若干の自治町内会が結成され、和白校区自治連合会に所属していたが、昭和57年7月に校区全区域の町内会を以て美和台校区自治連合会が発足した。

和白丘中学校開校

昭和55年4月、和白丘中学校が開校したことにより、それまで和白中学校に通学していた美和台校区、和白東校区の中学生は和白丘中学校に通学することになった。

美和台校区世帯数・人口・町内数

	世帯数	人口	町内数
1972年（昭和47年）	1,018戸	3,162人	6町
1984年（昭和59年）	3,614戸	11,161人	13町
1999年（平成11年）	5,167戸	13,738人	17町
2005年（平成17年）	6,236戸	15,620人	20町

幼稚園・保育園・いこいの家

- 1973年（昭和48年） 美和台幼稚園開園
- 1975年（昭和50年） 老人いこいの家完成
- 2003年（平成15年） 同 改築
- 1975年（昭和50年） 静ヶ丘保育園開園
- 1976年（昭和51年） ツルタみとま幼稚園開園



昭和52年 開館当時の美和台公民館



平成16年 改築後の美和台公民館



開発前の美和台（昭和42年）



昭和54年の美和台地区

